

# 当院職員が上毛新聞に掲載されました

令和三年四月二十一日

## 心づないで 医療通訳の今

「(患者に) 病気のことを理解できたこと喜んでもらえるだけでうれしい」

ペルー国籍を持ち、スペイン語が母国語の江頭さゆりさん(27)は太田市では看護師として県内の病院で働く傍ら、自身の病院や依頼があった医療機関で医療通訳のボランティアをしている。

## 不安に配慮

江頭さんが医療通訳を始めたのは昨年。通訳者の不足を取り上げた新聞記事を目にし、「役に立てるのではないかと考えたのがきっかけ」と考えたのがき

おさら、受診の壁が立ちあがる。

家族で日本に移住した外国人の多くは、学校に通う子どもが日本語を習得し、さまざまな場面で日本語が苦手な両親の通訳代わりになっている。だが、専門用語も多い医療機関での受診の際は難しい。単身で来日し、日本語がほとんど話せないような外国人にはな

## ▼上▲

「はい」と答えたとして、理解しているのか、理解していないけれど返事をしただけなのか。それは人間同士じゃないと分からないでしょう」

## 仕事と掛け持ち

一日がかり

江頭さんもその一人。勤務する病院の理解を得て、多い月は3回ほど、非番の時に別の病院に派遣される。一日がかりで付き添うことは珍しくない。言葉が通じないことで、患者が不安を抱え込んだり、病院とトラブルになったりすることもある。自身の休暇を充てることになるが、「全

# 善意頼り継続に課題

もあり、万能とは言えない。「近い将来に、より高性能な翻訳機が登場すると思う。でも、機械には不安な気持ちや文化的背景などにまで配慮した通訳はできない」。江頭さんは例を挙げた。「同じように

「近い将来に、より高性能な翻訳機が登場すると思う。でも、機械には不安な気持ちや文化的背景などにまで配慮した通訳はできない」。江頭さんは例を挙げた。「同じように

「近い将来に、より高性能な翻訳機が登場すると思う。でも、機械には不安な気持ちや文化的背景などにまで配慮した通訳はできない」。江頭さんは例を挙げた。「同じように



看護師の傍ら、医療通訳のボランティアを請け負う江頭さん。「患者のために」という思いが原動力だ

本県に居住する外国人は114万約6万人。彼らが医療機関を訪れる際、頼るのが医療通訳だ。専門用語の理解を求められ、時にはつらい場面にも立ち会わなければならないが、その人員も待遇も十分とはいえない。医療通訳の現状と課題を探った。